

# 朝仁貝塚調査報告書

河 口 貞 徳

## 1 調査経過

昭和 44 年 8 月、名瀬市教育委員会から、朝仁貝塚の発掘調査を依頼されていたが、都合によって、同年 12 月 6 日より 11 日に至る 6 日間の発掘調査を実施した。

同貝塚の所在は早くより知られていたが、(1) リチャードピアソンによって試掘が行なわれ、また国分直一によって表面調査がこころみられたけれども、本格的な発掘調査は今日まで行なわれていない。

今回名瀬市教育委員会が発掘調査を実施した理由は、名瀬市の、名瀬都市計画朝仁土地区画整理事業区域内に朝仁貝塚も包含され、同貝塚は一部道路によって切断され、又埋立て工事によって地下に埋没することが予見されたため、同貝塚の埋蔵文化財としての意義を明らかにし保存の当否についての判断を下すためであった。

## 2 自然環境

朝仁貝塚は、朝仁部落の東端、県道湯湾恩勝名瀬線の南側に沿って、3ヶ所に分布している。県道に最も近接した、朝仁前間 318 番地(富山隆夫所有地)のもの、(A 貝塚と仮称)、県道より最も遠い、朝仁伊間 314 番地(日高源一郎所有地)のもの(C 貝塚と仮称)、両貝塚の中間に位置する朝仁伊間 309 番地(徳永忠範所有地)のもの(B 貝塚と仮称)の三つである。

朝仁部落は、赤崎と摺子崎の両半島に囲まれた湾入の、東よりの湾頭部に位置する。三方を標高 100 メートル乃至 200 メートルの山地に囲まれ、北は海に面した小さな沖積地であるが集落は、海岸に面した砂丘上に立地し、新川に沿った低湿地をさけて、高燥な健康地を選んだものである。この低湿地が土地区画整理の対象となっているのであるが、以前は水田又は畠地として利用されており、朝仁貝塚は、この耕作地帯と、集落地帯の境界に存在しているのである。

## 3 調査の概要

遺跡地は低平な畠地帯で、県道沿いの A 貝塚の立地する畠面は県道面より 20 センチメートル低く、B 貝塚の立地する畠面は約 90 センチメートル、C 貝塚の立地する畠面は約 120 センチメートル低い。したがって県道より南方へ、きわめて緩かな傾斜をなすわけである。A 貝塚は県道に最も近く、西端部は県道より南へ 9 メートル、中央部は 5 メートル、東端部は 12 メートルの距離にある。

平面形は略東西方向 (WS 13度) に細長い不規則な形を示し、長さ 33 メートル、幅は中心部が最も大で約 8 メートル、両端では 3 ~ 4 メートルである。

断面形は蒲鉾状で最高点は 130 センチメートルであった。

調査は貝塚の中心部の最も幅の広い部分を切断するような形に、2 × 8 m のトレンチを設け北より I ~ IV 区とした。

地層は、表面より第 1 層、褐色表土層 30 cm、第 2 層、角礫を含む大形巻貝層 70 cm、第 3 層 小形巻貝を混する褐色土層 20 cm、第 4 層 貝粉まじり褐色砂質土層 30 ~ 20 cm、第 5 層 うす色の黒褐色砂層 50 ~ 10 cm、ところによって深い落ち込みがみられる。第 6 層 基盤純砂層の 6 層から形成され、遺物包含層は第 2 層の大形巻貝層である。出土状況は、先史時代の石器、須恵器、青瓷、白瓷、現代陶器、ガラス器などが搅乱の状態で発見された。

第 3 層の半ば以下の地層は、現在の地表面と同一水準にあって、形成された時代も同一時期と思われる。したがって、遺物包含層である第 2 層以上は、現在の地表面が形成された以後に堆積されたもので、貝塚形成の時期は比較的あたらしい。

搅乱という場合は、古い堆積層に、後の時期に加わった人工的または自然的原因によって異なる時代の物がまぎりこんだ状況をいうのであるが、A 貝塚の場合は、これとことなり、堆積する時点で時代の異なる遺物がまぎった二次堆積の貝塚である。

B 貝塚は、西端部で県道より 49 m、東端部で 54 m 南の地点にある。A 貝塚との中心点間の距離は 60 m で、A 貝塚南東方向に位置している。形は細長く堤防状をなし、高さは地表面より約 1 m、幅は最大 3 m、WN 5° である。

3 × 2 m のトレンチを、貝塚を横断する形で設定した。

地層は 4 層を数え、上より第 1 層 ~ 第 4 層とした。

第 1 層 厚さ最大 1 m、円礫、角礫をまじえた、大形巻貝で、遺物包含層である。

第 2 層 厚さ 40 ~ 27 cm、小形巻を小量含む混土貝層で、遺物はほとんど包含しない。

第 3 層 厚さ 35 ~ 25 cm、褐色砂層で、遺物を包含しない。

第 4 層 基盤砂層 海成の砂層で無遺物層である。

出土状況は A 貝塚と同様で、先史時代石器、青瓷、白瓷、須恵器、現代陶器、ガラス器などが搅乱の形で出土した。貝塚形成の時期及び原因ともに A 貝塚と同じである。ただ異なる点は A 貝塚が青磁を比較的多く出土するのに対して、B 貝塚は、須恵器を比較的多く出土する点であろう。

C 貝塚は、県道より 99 m、A 貝塚より南南東 93 m の地点に位置している。長さ 15 m、幅 3 m の不正長方形で南北方向の貝塚である。この貝塚は比高が最も低く、周辺は低湿となっている。

3 × 2 m のトレンチを、貝塚横断の形に設定して発掘した。

地層は 5 層を数え、上より第 1 層 ~ 第 5 層とした。

第 1 層 厚さ 55 cm、角礫、円礫を含む、大形巻貝層で、遺物を包含している。

第2層 厚さ40cm, 磨きを含む混土貝層である。遺物を包含している。

第3層 厚さ35cm, 角磨きを含む大形巻貝層である。遺物を包含している。

第4層 厚さ50~10cm, 黒土層である。遺物は包含しない。

第5層 基盤砂層, 無遺物層である。

遺物の出土状況は前者と同様で、須恵器、青瓷、白瓷、現代陶器、ガラス器などを出土する二次堆積の貝塚であった。

以上3個の貝塚は同様の原因によって、大体同時期に形成された二次堆積の貝塚であるということができる。

貝塚調査のほかに周辺調査として、B貝塚の南3.5mの地点を基点として、略南北方向(NW30°)に14×2mのトレンチを設定した。地層は表層(第1層)10cm, 褐色層, 第2層30cm, 小形巻貝のまざった褐色土層, 遺物包含層, 第3層, 基盤砂層, 無遺物層となっている。基盤の砂層には14個のピットが発見され、40×45cmの楕円形焼土か所、40×55cmの楕円形焼土か所の炉址とも思える地点も出土し、他に中央に石2個を置いた凹所も発見された。

#### 4 遺 物

遺物は、先史時代、中国系、本土系の三類にわけることができる。

先史時代遺物としては、打製石斧及びたたき石がみられる。前述のように各貝塚は二次堆積であるために、この遺物は付近の先史遺跡が破壊され地表に露出したものが再堆積したものとみられ 貝塚附近に先史遺跡の所在したことを示すものである。

中国系遺物としては、青瓷、白瓷がある。碗、皿が大部分で、元及び明の時期のものである。青瓷には明代のもので、底部の厚い華南系のものもみられる。当時における中国との交易の存在を証明するものとして、重要な歴史的資料である。

本土系の遺物としては、須恵器、須恵質の陶器、石鍋、初期伊万里焼と思われる陶器など出土している。平安末期から鎌倉末かけての須恵器あるいは滑石製、石鍋のほか、備前では龜山焼と称する。須恵系統の陶器などが移入されている。

#### 5 む す び

朝仁貝塚は、現地表面の上に堆積形成された貝塚であって、一般の貝塚とはその形態、成因を異にしている。先史時代、歴史時代を問わず貝塚が形成される場合は、形成された時代の遺物はある一定期間に限定され一つの時期を表現している。しかし、朝仁貝塚の場合は、一つの時期でなく、各時期のものが、上下に混合して堆積している。これは堆積の時期に破壊された附近の各時期の遺跡から露呈された遺物が、まじり合って堆積したためである。

以上の如く朝仁貝塚は一般にいうところの貝塚とは意味をことにするがその中に包含している遺物は、歴史時代における奄美と中国あるいは本土との交易を証明する唯一の資料であって奄美の歴史・文化を解明するために重要な価値をもつことは言うまでもない。 終り

〔注〕(1) ハワイ大学助教授 (2) 東京教育大教授